

奉悼明治天皇歌並短歌：文苑

著者	陶山，喜六
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 4 7
ページ	5 4 - 5 5
発行年	1912-11-18
URL	http://hdl.handle.net/2298/6397

So wandern bei den erhabenen Klängen gnostischer Melodien in den elysischen Fiebern anmutige Schatten dahin — freudlos und leideos.

Fugenheft.

(大正元年十月二十日夜)

奉悼明治天皇歌並短歌

陶山 喜六

久堅の、天が下には、國はしも、多にあれども、空爾見津、大和の國は、千早蕨、神の御代より、傳はりて、かはらぬ國よ、其國の、神のみするに、あれまして、大御寶を、安らけく、知食しつゝ、日の本の、本つ光を、いちじるく、八洲の外の、海かけて、照しましたる、高光る、日の大御神、安見知、我大君の、草管見、やまひましゝを、四の民、うれへまつりて、鳥羽玉の、夜はすがらに幣帛を、神に平向けて、茜さす、晝はひねもす、玉串を、神に捧げて、かくきはぬ、赤き心に敷妙の、家をも身をも、白波の、かへりみなくて、墨繩の、たいひとすちに、神等に、祈りまつれど、靈幸、神のみめしか、掛卷も、畏かれども、生母の、其甲斐もなく、神隨、神去りましつ、天の原、岩戸を開き、神あがり、あがりいましつ、いかにせむ、如何にせましど、日刺方の、天をば仰ぎ、荒金の、地に平伏し、鹿自物、這廻らひ、射部人の、伏轉輒て、岩根も、裂けよと號叫び、綿津見も、あせよとばかり、慟哭きつゝ、黒自も知らに、くれまごふ、現の闇の、天が下、ぬれ伏す四方の、み民草、また差し出でし、み光の、影をかしこみ、宣りませる、御詔尊み、ひるまなき、袂をしぼり、つくよなき、かなしびしぬび、群肝の、心の限り、うつしみの、からだのきはみ、天皇に、極

め盡して、秋津洲、國の光を、天つ空、日の照るきはみ、かぐやかし、天津日繼は、天地の、榮のきはみ、
安らけく、幸くいませと、朝宵に、つかへまつらむ、吳竹の、伏見の山に、神ながら、鎮りませる、天皇も、
さかゆく御代の、行末を、みそなはしつゝ、護りますらむ。

反歌

みひかりのかぎりなきよに生れあひててゐる日のくれし日にもあひけり

明治天皇奉悼歌三首

陶山喜六

天つ日のかくれいまして天が下青人草の色なかりけり

諒闇の秋といふをよめる

千萬の民の涙やそひつらむいとしぐるゝこの年の秋

御大葬の日よめる

いどぶなほほさぬ袂をしぼるかなかへりきまさぬけふの御幸に

乃木將軍追悼三首

陶山喜六

のこしたく君がまことの言の葉はいくよの春かしげり行くらむ
天地もつらぬく君がまごゝろはやしきの外にかぐやきにけり
大君のみあとしたひてゆく君の赤き心を心ともがな